
失った、から。

レオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失った、から。

【Nコード】

N3124Z

【作者名】

レオ

【あらすじ】

私の春はなにかを失うの……。

出会い

「ごめん・・・俺好きな人、できたんだ・・・」

「そう、幸せにね」

・・・また、失った。

桜吹雪の中、私は、また、失った。

これで何回目かな・・・。数えられないや。

たしか桜の花言葉に「あなたにほほえむ」ってあったと思んだけどな。

どうしてか、日本の桜たちは私に微笑んではくれない。

正確に言つと、一瞬微笑んですぐ鬼の形相・・・かな。

私は花ノ日花華^{かのひはなが}、高校1年生。

春になると、絶対に何かを失う。

今年は、彼氏・・・か。

と言つか、今年も・・・が正解だね

入学早々、振られるとかなんて不運なんだ・・・。

桜の木にもたれながら優雅に本を読んでる私は

今日、始業式。高校生最初の日・・・だと思われる。

これも正確に言えば、始業式にも出てないから

いきなり休み・・・って事になるんだよね。

「教室いかないと友だちできないけど？」

一度中学のときの倶楽部の先輩に言われた事。

・・・そんな事知ってるよ。私はあえて出ないし行かないの。

友だちなんてつくって何になるんだって話。
わたしの場合、すぐ失ってしまっただから
それなら元からいないほうがよっぽどまし。

だから、地元とは遠く離れた桜ヶ丘高校にきたって言うのにね
桜は私のこと好いてないみたいだけど、私は好きなわけだから
この高校はいいと思う。多分・・・

本を閉じてボーっと丘の下の町を眺める。

この高校は本当に高い丘の上にあって

その中でも私が今もたれてる桜の木は学園の中でも
学園から離れていて人に見つからないから楽。

まあ、これはオープンキャンパスの時に見つけたんだけど

上から見る町は、太陽に反射してキラキラとしてきれいだ。

それに桜がちらちらと舞っていて、いいかんじ。

写真に収めたらもつといいかもね、まあ今はカメラもってないんだ
けど・・・

もう一度、本に目を移す。今読める本は「桜吹雪にさようなら」
と言う本。

まあ・・・なんとというか・・・恋愛物語、つばいの。

友情物語も入り混じってる、の・・・かな。

こんな事をなんとなくボーっと思いつながら本を読んでも

本来ならば誰の声も聞こえないはずなのに、いや聞こえるとしても
鳥とか猫とかの声だと思ふのに、なのに不意に

耳元から人の声が聞こえた。

「君、始業式でないの？」

その声には私は振り向いた。

そこには、茶色の髪に青色の目でピアスをして

服は少し着崩しているチャラそうでチャラくない？

男子が腰に手を当てる極上の笑顔に向けて立っていた。

残念ながら可愛げのないことに、私は人見知りをもったくしなないからその男子をじい……っと思ってしまった。

「そこまでじいっと見られると俺のほうで恥ずかしくなるんだけど」

「あ……すみません。」

腕を見るとリストバンドは黒だから2年生か、この人。

(この学園は各自生徒が学園専用のリストバンドをはめて、何年かを見分ける仕組みなってるらしい。

ちなみに1年は白で2年は黒。3年は赤色だったはず)

「君、俺の事怖がらないんだね？」

「どこにも怖がる要素が見つかりませんよ？」

「変わった子だね、えっと、何年？」

「1年です。すみません、リストバンドつけてなくて。」

「別に、いいよ。まあ、俺生徒会長だけど、ニシシ」

無邪気に笑うこの人を素直に可愛いと思う……ってか

「生徒会長?!」

「うんーそうだよ?」

「って生徒会長って始業式の挨拶とかなかったんですっけ?!」

「うん、あるよ」

そりゃそうたる見たいな顔で言うけど

ならいかなきゃいけないでしょうよ……?

「なら行った方が……?」

「ああ、大丈夫。生徒会長は熊さんに任せた」

「・・・は？」

「まあ、副会長だよ。だから、いいの」

「うわぁ・・・」

「適当・・・」

「つてやば！言っちゃった！！」

「す、すみません！タメで失礼な事を・・・」

「別にいいよ、そんなの気にしないし。しかもタメで全然おっく」

「・・・ほんとに適当ですね。」

「良い褒め事だよ。俺にしてはね、つてうわぁっ」

どかんっ

生徒会長は丘のちよつとしたの平たい岩に落ちていた。

「くっ・・・ははっはははっ！会長さん、どんくさいですよ（笑）」

「

生徒会長は「イテテ・・・」と言って、岩に胡坐をかいて座った。

そして、私がいる上を見上げてまたにこりと極上の笑顔を見せて

「やっと、笑ってね？」といった。

私はその優しい眼差しに惹かれそうだったけど

惹かれてはいけない、と言い聞かせすぐに目をそらした。

・・・失うなら、いらない。

それが私の教訓・・・。

「また悲しい顔したな。入学式といい見学の日といい君にハッピーな事はないのか？」

「・・・毎日幸せな顔なんてしてないですよ」

「もつたない。そんな可愛い顔してんのにね」

「それはYesもNoもいえないですけど・・・」

すいません、これ以上会長と一緒にいるとよくないのでこの辺で。さようなら」

自分からさようならを言うのはスキじゃない。

けど、そうでもしないと、相手からさようなら、を聞いてしまう。

・・・簡単に言えば逃げているだけ。

「なんで逃げるの。」

低い声で、でもよく通る声で会長は私に問いかけた。

「・・・プライベートの情報は丸秘です」

「問いかけにはアンサー」答えがある

「式はないです」

「それは数学だけだ。国語でもアンサーはあるだろ」

「あれは自分の考えを言うだけであった答えはありません」

「・・・君文句言うの得意？」

「そんな得意いらないますよ。」

「あつそう。とにかく教えてよ。じゃないと、この本、奪っちゃうよ?。」

ハッとして振り向くと会長が今にも丘の下に

本を投げようと腕をブンブンと振っていた。

「・・・わかりましたよ・・・。」

「よっしや」

「なんか無性にムカつくんですけど・・・。」

「まあまあ。それは俺の特技だから。」

「いやな特技ですね」

「良い褒め言葉をありがとう」

またニツコリ極上の笑顔で笑う。
この人、よく笑うよね

「いつもそんなにニコニコしてるんですか？」

「まあねー。笑顔は最強の魔法だからね」

「そう・・・なんですか」

「そ！俺は笑顔が好きなの！んでもって、ヒマワリも好き」

「・・・花言葉が・・・笑顔、だから・・・？」

「そう！大当たり！んでもって、今の君にはハイビスカスが、ミムラス」

ハイビスカスは笑顔がみたい・・・

ミムラスは笑顔をみせて・・・か

「会長には雛菊とヒマワリですね」

「ふーん・・・雛菊はどんな花言葉？」

「無邪気ですよ」

「ほほお。俺は無邪気と笑顔がとりえってわけか」

「い、いや！そういうわけじゃ・・・！」

「べつに、いいよ？間違ってるじゃないし。まあ、そこにアホをいれないと俺にはならないけどね？」

「あ・・・そこ・・・」

「忘れてたっと思ってた？」

「・・・はい。」

「正直でよろしい。で、君は何故逃げる？」

本当の事を話のはコレが始めてだ。

10分ほど前に出会ったこの会長が一番最初に言う人って言うのもなにかおかしいけど、でも、言わなきゃな・・・と思ってしまう。

「私は・・・春には、なにかを失ってしまっんです」
会長はその言葉を静かに聞いていた。

「中1が飼ってた猫の花、中2、中3、高1と彼氏に振られました」
会長の青い目が少し潤んだように見えた。気のせいだと思うけど

「・・・小学生の頃には父と母をなくしました。」

会長は目を見開いて、一筋の涙を流した。

青い瞳から流れる透明のしずくがよく見えなかったのは・・・

私も、なっているから・・・だった・・・

生徒会

「すみません・・・失礼します」

私は会長との間に居たたまれなくなった。

怖い・・・

こんな事だからまた、失ってしまうんだ。

「まって！君、もしかして俺らも失うと思ってる？」

その言葉に胸が跳ねた。

・・・凶星だ・・・

「そう・・・ですよ。今日出会った人まで失うなんて

悲しいじゃないですか。だから、出会いなんていららないんですよ。」

「嘘だ。君、声震えてるよ？」

ツカ・・・ツカ・・・

会長がこつちに歩いてくる。

私の体は硬直して、気をつけのままに棒たち。

会長は私の耳元で

「生徒会に、任命します」

と、言い、私の前にたって、またまた極上の笑顔を見せた。

「生徒会・・・って1年入れない・・・ですよね」

「別には入れるよ？会長任命だから。高校推薦と一緒にだよー。ほら、生徒会室いくぞ？」

「い、いやです！なるべく学園の校舎内には入りたくないんですっ」

「ふん、って知るかよ。おらあ、いくぞー」

会長は私の腕を掴んでぐんぐん校舎に向かっていく。

「あ、あの……！名前、聞いても……？」

「桜庭先輩さくらばはなすけ。女みたいな名前だろ？」

「キレイな名前ですよ」

「君の名前は？」

「花ノ日花華。花ばっかつくんだ」

「へえ、花華もキレイな名前だね？よし、じゃあ花って呼ぶ」

「あ、はい」

なんとなく幸せだった。

コレもいつかは失ってしまうのだろう……

けれど、今だけ……少しだけ

幸せでいさせてくださいませんか？神様……。

生徒会の入り口前に立つ私と会長。

私の体は相変わらず硬直しまくり。

会長はと言うと、ケータイで誰かと話している。

「大丈夫！いいの捕まえてきた！」

『どーセブスだろ』

「いいや！これがまたかわいい子だよ？」

『まあ、期待はせずそっちにいくよ。んじゃあな』

「ばいびい」

「桜庭会長って、口悪い？」

「んー、結構な。てか、会長はやめろ」

「なんですか？」

「なんか、変な感じがする。俺めったに会長とか呼ばれないからや。

せめての桜庭先輩にしてくれない？」

「わかりました。桜庭先輩」

「よろしい。そんじゃ、もう少して熊・・・っと副会長が来るから
「はい。」

5分ぐらいして、副会長・・・と思われる、知的な人が桜庭先輩と
私の前に来た。

「その子が書記担当してくれる1年？」

「あ・・・えと・・・花ノ日花華です。」

「俺は副会長の熊井宏太くまいこうた。よろしく」

そういえば、桜庭先輩も熊井先輩もかつこいいよね・・・

「花、また人じいつてみるよ？」

「え！あ、す、すみません！」

「いいけどね？なあ、熊。」

「その呼び名いい加減やめろ。うつつうしい」

「な、ひでえやつ！てか、はやく会長室空ける！」

「それお前の部屋になってんじゃん。いやまあ、間違っでないけど」

間違っでないんだ・・・。

「花、こいつに会う花言葉は？」

「え、つと・・・アガパンサス・・・ですかね？」

「どつという花言葉？」

「えつと、知的の装いです」

「てことはー熊は知的キャラを演じて・・・くはっ！」

桜庭先輩は副会長に一発溝打ちを受けた。

「てめえ、はだまつとけ。阿呆。花華、入って」

副会長に促され、私は生徒会室にはいった。

すると、いきなり前に桜庭先輩と熊井先輩が出てきた。

「へ・・・？」

「花！ようこそ！」

「生徒会へ！」

その言葉に嬉しさを感じつつも・・・

また、この嬉しさを失ってしまうのかと思うと
色々な意味でまた涙が出てしまった。

学園

「ちよ、また泣く?!」

「何、泣き虫?」

「なん・・・でも、ないです・・・」

嬉しいような悲しいようなで泣きましたなんていえるはずもなく
私はしゃがみこんで泣いていた。

「ほらほら、よちよち」

「お前なあ・・・。1年つつつても小1じゃねえんだから
その扱いやめるよな?」

「いや、泣いてるからさっ」

「泣いてるからってその接し方は色んな方向で間違ってる。
つか、お前ロリコンみたいになってんぞ」

「うげえっ。やめるよ、ロリコンなんて。せめてくまこん、ぐはっ」

悲惨な声が聞こえて、顔を上げると

そこには、また熊井先輩に殴られたかなにかされたであろう表情の
桜庭先輩がいた。

「お前はロリコン決定な。花華、ソファ座って良いよ」

「あ、ありがと、ございます」

桜庭先輩を横目でチラッと見てから
私は茶色のソファに座った。

あ・・・ふかふかで気持ちい・・・

「そ、その・・・ソファ・・・ふかふかだ・・・ろ?」

「桜庭先輩、一回座ったらどう、ですか？（苦笑）」

その表情を見るとこっちがむなしくなってくる。

「い、いんだ・・・こ、こんなことは日常茶判、ぐは！」

今度は肩をチヨップ。

熊井先輩は不適に笑い「いい加減だまんねえと絞めころす」と
なんともまあ・・・残酷な言葉を言い放ち、仕事（？）に戻った。

私はふと、疑問に思った。

「あの・・・この生徒会はこの3人だけ・・・？ですか？」

「違う・・・よ、後3人・・・いる・・・よ」

「ああ・・・桜庭先輩、もうしゃべんなくていいですよ・・・。
大変そうです、色々と」

「そ、そうか・・・すまない・・・な・・・バタツ・・・」

自分でバタつていつてどうすんですか・・・。

そんな事を思い、もう一度前向き直ると

そのすぐに、生徒会室・・・自称会長室のドアが勢いよくあいた。

「おはよう」

「おーはよ。つてあれ、董、まあたフクマにやられたの？」

「てかてか！可愛い女の子いるーっ！え？董の彼女？」

金髪と茶色を混ぜたような髪をキレイに整えている、

ちよつとナルシストっぽい男子と

金髪のふわふわした髪を揺らして、ニコニコしている男子と

茶髪で、目は赤でちよつとヤンチャっぽいちつさな男子が

桜庭先輩をお構いなしに（と言うか桜庭先輩をふんずけて）私のほうに来た。

「あ……えと……桜庭先輩に生徒会書記を任命されました……花ノ日花華です……。よろしく、おねがいします」

「おー。1年で不思議で可愛い子ってこの子のことだな？」

あ、俺は井伊田瑠歌。ここの雑用ONE！

「聞いたとおり、可愛い子だったね？俺は黒葉清。」

雑用係？だよ

「んで、俺は桜庭桜。書記ONE！

あ、名前は桜って書いておみって読むんだぜ？まあ、当て字だけだな」

みんなニコニコしていて、愛想がいい。
良い人……。そうだな……

……。あれ？桜庭桜……。って……

「桜庭……？」

「ああ、俺と董は兄弟。」

だからなんとなく雰囲気似てたんだ！

「納得……」

「だろ？（笑）」

二ヒヒ……。って笑うところなんて

そっくりだな……

「と言うか、ほんと、花華可愛いなあ？」

おみ先輩のほうと反対方向に頭を向けると

くツと顎を持ち上げられ、誰かの顔が近くにきた。

「ふえ……。？」

「食べちゃいたいよ」

ニコリと笑うが怪しい……

えと……この人は瑠歌……だったけ？

「あ。。。あの……。。えと……ちか、ちかい……です……

」

「ん？そうかな？」

は、はずかしい／／／／／／／／／／

「こらこら、瑠歌！1年生を怖がらせちゃだめだろ？」

止めに入ってくれたほぼ私の中では天使様並みの格のこの人は

清……だつたっけな？？？

「いいじゃん、べつに。けーち」

「怖がらせたら落ちる女も落ちないっていったのどこのどいつだよ」

「このこいつだよ」

「うっせ、そこで返すな！花華ちゃん、大丈夫？」

「あ……えと……大丈夫、です。ありがとうございます、黒葉

先輩」

「いえいえ。こいつの変態度には毎日世話やかされててなれてるか

」ら

「んなに世話やかしてやってねーよ」

「上から目線で言うな、アホ」

こんな、人の会話さえが幸せに感じる。

今日であつたばかりの人だけど

とても、幸せ。

この人たちのそばにいれば、いつかいろんな人から

「ハイビスカス」の花言葉……言ってもらえる、かもね……

桜庭董

学園に入ったけど、私は出席を取るとき以外は生徒会室以外の教室にはいかなかった。

授業中は桜の木の下の。

休み時間は生徒会室。

人と接してる限りでは、生徒会の先輩達が落ち着くけどやっぱり一番落ち着くのは大きな桜の木の下だった。

もうほとんど桜は散ってしまっただけで桜吹雪とまではいかないけど最後の最後まで葉を食いしばって、散らないように頑張っている桜がちらほらと見える。つつい、がんばれ！って応援したくなるぐらい食いしばってるんだよね

キーンコーンカーンコーン……

「お昼休みだ」

私はゆっくり立ち上がり、いつもの自分のペースで校舎に向かった。

「ニヤアオ」

不意に後ろから子猫の声が聞こえたと思って振り向くとそこには……

「びっくりしたあ？」

と……イタズラ笑顔満面の……桜庭先輩がチャームポイントだと自分で言っている八重歯を見せていたずらに笑っていた。

「先輩……。もう、可愛い猫だと思ったのに」

「俺も可愛いじゃん！俺も撫せて」

「やですよ。もう、生徒会室行きますよ」

「花、急に厳しくなったな？」

「いつもこんなもんですよ。」

「ふうん……ってんなわけあるかつつの。」

「そんなわけあるんです。桜庭先輩の感じ間違いですよ」

「まあ……それならいいんだけど無理すんなよ？」

「……私が何に無理をしてるというのだろうか。」

「あ、てか。もうそろそろ俺の事桜庭先輩じゃなくて
董って下の名前で呼んでくれるかなー？」

「……別に、いいですけど……」
でも……

「男子の名前を下で呼ぶのは初めてです……」

「へえ、そつかあ。まあ、新たな一歩って事で！」

「……はい」

先……董は私に近寄り頭に自分の手を置いて
くしゃくしゃとした。

董のいつもの癖、だ。

そしてこの後にいつも……

「ほんと、花は可愛い」

……ほら、言った。

いつもこれを言うんだよ

よくわからないよ

でも、この手とか声とかに

まだ1ヶ月もたってないのに、安心して

ギュツて抱きつきたい気分になる時もあるぐらい。

生徒会の皆は、全員優しい・・・
それも程よい優しさであまったるいわけじゃないんだ。
本当に、この人たちには感謝してる・・・

「花？」

「あ・・・ごめん、いこう」

「うん、あ、そだ。手！つないでいかね？」

「・・・幼稚園児みたいですけど。。。」

「いいじゃーん」

「わかりましたよ・・・」

「やったね」

董は私の手を取ってギュツと握った。

董の手はとつても暖かくつて
とても落ち着いた。

「なんだか、董・・・最初とキャラ違いますよね・・・？」

「まーコレが素の俺よ。あれはつくりもん。」

そっか、それじゃ董の素は

「温かいん・・・ですね」

「ん？なにがあ？」

先輩はまるでなにもわかっていない。

多分、きつとあなたのその体温に触れる人は
幸せだろう・・・と。

「手。あつたかい」

「だろ」

他愛のない会話が楽しい。
コレは私の今の幸せ。

熊井宏太

「やつほうう!!!!!!」
生徒会室に入るなり、董はハイテンション。
んー……といつもの事かな……?

「董つつさい。会長ならもつと落ち着けないのか……」

「会長はこのぐらいハツ茶けてるほうがいいんだよ!なあ?花」

「え?あ……えつと……」

「1年に同意を求めんな。花華、今すぐにも首がコキリと右に折れそうだ」

「へ……?」

「本当に首折れるよ?」

そういうと、熊井先輩は「ほら」と言っ

私の頭をぴんつと指ではじいた。

そこで私はやつと自分の首が結構右に曲がってるのに
気付いたわけで……。

「くっ……!首痛めないように、気をつけな」

「は、はい」

パツと先輩の顔を見ると、いつもは鋭い目つきをしている熊井先輩が
優しい目で笑っていた。

「あ……っ」

「どうした?」

この人の表情って言うのは大体硬いけど
緩んだ時とか、わかりやすいなあ……

「眼見、癖かなんか？」

パンチツと糸が切れるように私の中の神経が
現実に引き戻される。

「え?! あ、えと・・・わ、わたしあまり人見知りしないので・・・

」

「へえ・・・それにしても拳動不審だけだな」

「・・・私、人とあまり会話って言う会話をしないんです・・・よね」

「なのに人見知りしないって、すごいな」

「それ、母親にも言われました」

熊井先輩は「ああ、やっぱり？」と笑った。

「・・・やっぱりかっこいいなあ・・・」

「あの・・・熊井先輩はもてますか？」

「は？」

単刀直入すぎた・・・!と思ったけど

答えが意外にも帰ってきた。

「まあ、月2ぐらいのスピードで告白はされるな」

「ええ?!」

「バレンタインのチョコは・・・数えた事ないけど、無数のチョコが
これまあ、どっさり」

まさかまさか過ぎてさすがに、腰が抜けている私。

「そこまで驚く？」

「いや、まあ、余裕でここまで驚きますよ・・・?」

「まあ、確かに最初は生徒会メンバーにも引かれたな。

つつてもまあ、この生徒会は何故かもてる奴が多い。董と桜おみには

ファン倶楽部まであるしな」

「ああ・・・なんとなく分かる気がします」

「んでもって、瑠歌は学園のアイドル」

「それもまあ、そんな感じがしますね」

私は苦笑だけどね・・・

「清は隠れファン増殖中。でまあ、俺はと言うとファン倶楽部とかそんなの

あんまスキじゃないから、つくんなって釘さしてある」

「何気に酷いですね・・・」

「うつとらしいもんは仕方ない。てか、花華も学園の見回りとか行ったら？」

「え・・・？どうしてですか・・・？」

なに・・・なにかのいじめですか・・・。

「多分つか絶対に花華はモテるとおもっただけど」

「え！？そ、そんな！めっそもございません！」

「文章の使い方大分間違ってるけど、そんなことあるから否定権なし。なあ？瑠歌」

なぜそこを井伊田先輩にふるの！？

「ん？ああ、そうだな」

井伊田先輩の後には桜先輩まで

「俺も同意」と言い

その後には黒葉先輩までも

「ぱつとみただけで美人さんだもんね」と言う。

董はと言うと

「そんな事きた時からわかりきってたんだろ」とわけのわからない事を言う。

「な、ななななんですかなあつ?!」
『そうなるもなにも、そうだから』

・・・

どーして5人の声がいつせいに揃うんでしょうか。

「くっ……。本当に花華の反応は面白い」

「熊井先輩サドですね?!?!」

「俺がサドなら花華はマゾだ」

「私いじられたいなんて思っていないですーっ!」

「思ってるくせに、意地っ張りさん」

頬をツンツンとされ、私は怒り勃発

「んもーっ」

ばかばかと熊井先輩を叩くものの

「痛くないよ」と笑ったまま言うものだから

どうしてもその手を止めてしまっ。

・・・熊井先輩の笑顔は誰よりもずるいと思う。

このギャップがもつともずるい原因。

「どうした?」

「・・・なんでもないです、もうお昼終わるので桜の木の下、行ってきます」

熊井先輩に頭を下げ、行こうとしたら

その下げた頭を上げたときにまた、指で私の頭をはじいた。

「あほ、無理すんな」

本日に二回目の無理すんな。

私は何に無理をしている?????

「我慢、しないでなんでも俺らに言えばいいんだよ」
熊井先輩は一旦真面目な顔になってすぐ

「いつてらっしゃい」とさっきまであった
優しい笑顔になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3124z/>

失った、から。

2011年12月13日21時54分発行